



歳を重ねるごとに理解が深まる一冊を、
傍に置いておくのもいいものです

小山薫堂

アイデアが行き詰まったら本屋へ

中学生のころから本屋が好きで、よく通っていました。特に目的の本があったわけではありませんが、店内に並んでいる本のタイトルを、ただ眺めているだけで勉強した気分になったのです。私にとって本屋は、知識を充電するための場所でしたね。

大学生の頃は作家のアルバイトをしていて、アイデアに行き詰まったときは「青山ブックセンター」にいつもお世話になっていました。なんとなく気になった本をバラバラめくっていると、ふと良い考えが思い浮かぶことがあって。まさに、アイデアを生み出すため





『おくりびと』授賞式にて



学生時代のころ。

「今ではPC1台でできる映像の編集も、昔は2台のビデオデッキを接続して作業していました」

の着火剤のような存在でした。

大人になった今も、時間があれば本屋に立ち寄るようにしています。並んでいる本を見ているだけでも刺激になるので、発想のヒントになる場所であることは、今も昔も変わりません。

人によっては一冊の本に感銘を受けて、人生が変わることがあります。そのくらい、本の力は偉大だと思っっています。事実、私も人生の要所要所で良書との出会いがありました。

良書は学びの宝庫

すでに絶版してしまいましたが、「お葬式」日記』は、クリエイティブな仕事の手本となる一冊。伊丹十三氏が初監督をつとめた映画『お葬式』の裏側を記録したバラエティブックで、この本を読んでいると、一つの作品を作る上で、いかに緻密にいろんなことを考え、壁にぶつかり、それを乗り越えてきたのがよくわかります。しかも、その苦しみさえもエンターテインメントに昇華させているところにプロ意識を



「今も、ときどき『アルケミスト』を読み返します。
主人公のサンチャゴから、毎回勇気をもらっています」

小山薫堂

こやまくんどう

1964年、熊本県生まれ。執筆活動の他、地域・企業のプロジェクトアドバイザーを務める。京都「下鴨茶寮」主人、「くまモン」の生みの親でもある。映画『おくりびと』で第32回日本アカデミー賞最優秀脚本賞を獲得。2017年より京都芸術大学副学長。

感じさせます。映画『おくりびと』の脚本をはじめ、数々の作品づくりにインスピレーションを与えてくれました。

仕事へのヒントという意味では、宮本武蔵の『五輪書』も欠かせません。外国の映画監督から『五輪書』をテーマにした映画を作りたいと相談されたのが、出会いのきっかけです。宮本武蔵は私の故郷でもある熊本・金峰山の洞

窟の中でこの本を書いたと言われているので、実際に洞窟を訪ね、「どんな気持ちでここにたどり着いたのだろうか？」と、彼に思いを馳せながら読み耽りしました。本自体は、剣法の奥義が具体的に書かれていて、一見するとごく当たり前のことを言っているように思えます。でも、読めば読むほど、じつはすごく奥が深いことに気付くのです。基本をどこに置くか、窮地に立たされたらどうするかなど、読むたびに新たな発見があり、まだまだ読み解くべきものが隠されている気がします。この本は、読む世代によって捉え方が違うと思いますし、私も昔はそこまで心に響きませんでした。でも、歳を重ねるほどに内容を理解できるようになり、気付いたら、自分の傍に常にある存在に。皆さんも、そんな一冊に出会えたら最高ですね。

若い世代の方々に薦めるとしたら、断然パウロ・コエーリョの小説『アルケミスト』です。羊飼いの少年サンチャゴが、エジプトまでの旅路で不思議な老人や錬金術師と出会い、人生の知恵を



リセット発想術

常識のほぐし方

小山薫堂

河出文庫

792円(税込)

無限の希望を貯めることのできる若さ。そんな価値ある財産を皆さんは持っています。ぜひ脳を空っぽにして、発想をリセットして、ページをめくってみてください。あなたの脳内でなんらかの化学変化が起こり、閃きが降ってくることを願っています。(小山)

河出文庫編集部より

小山さんはなぜ、常に新鮮なアイデアを繰り出すことができるのか、その秘密が書かれています。つまらない大人にならないうちにぜひ読んでみて下さい。



学んでいく物語なのですが、恐れず挑戦することの素晴らしさを教えてくれます。また、セレンディピティ（予期せぬ幸運）な出会いの尊さや、諦めないこと、好奇心をもち、つねに行動することの価値についても考えるきっかけになるはず。何度読み返しても勇気が湧き出てくるから不思議です。

放送作家 脚本家 小山薫堂